25) PMD児にみる対人関係の発達に関する考察

国立療養所東埼玉病院
川上範子　山川和正
新堀祐二

＜目　　的＞

ＰＭＤ児を取り巻く環境要因の中で、特に人格形成上、大きな役割を果たすと思われる対人関係について、患児がどのように受けとめているか、また普通児（喘息児）と比較し、ＰＭＤ児の対人関係の受けとめ方が特殊なものがあるか、などを知り、年令による違いをも考察し、当病院における生活指導の一助としたい。（青年心理研究会の豊田氏の方法による）

＜方　　法＞

対象児はＰＭＤと普通児の１１才〜１６才までの男子で５４名についてアンケート方式で調査を行なった。問題場面を（１）勉学、（２）交友、（３）異性、（４）家庭、（５）自己、（６）将来、（７）人生について次の３設問項目

(1) 頼りにするのは誰れか、の依存について。

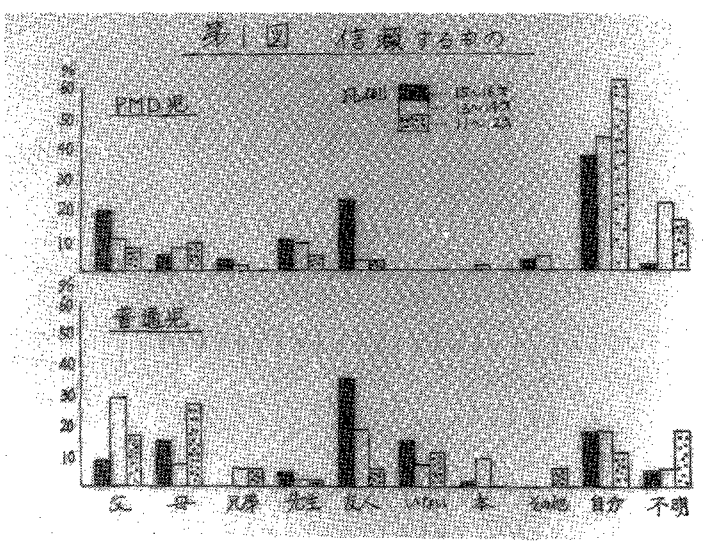
(2) 誰れの考えを参考にするか、の影響について。

(3) よく話し合うのは誰れか、接触について。

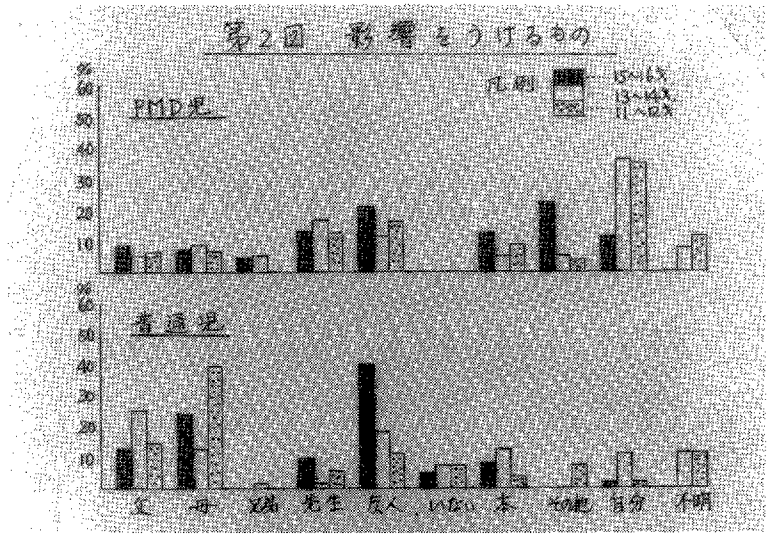
設問し、次の対象（父・母・兄弟・先生・友人・いない・本・その他（病院職員）・自分・不明）の中から選ばせた。

＜結果及び考察＞

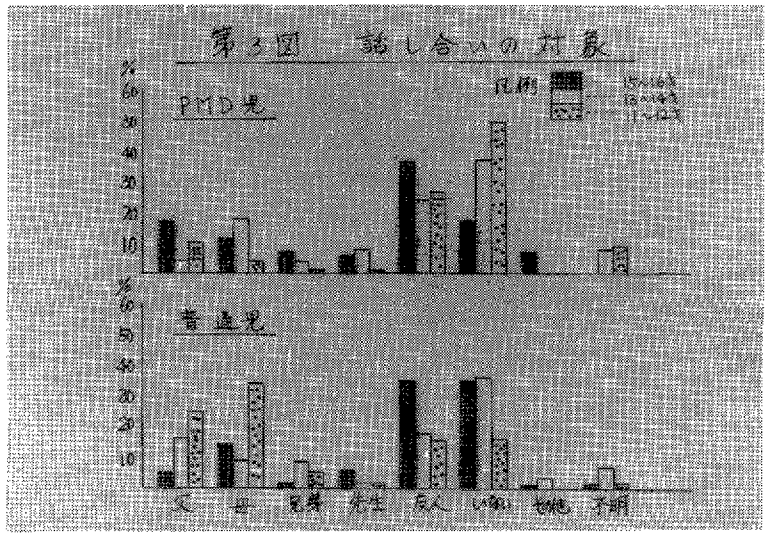
第１図の「信頼するもの」についてＰＭＤ児と普通児を比較してみると、ＰＭＤ児の（自分のみ）とする比率がきわめて高く、特に１１才〜１２才ほどその傾向が伺われる。これに対し、普通児は、



ＰＭＤ児の½以下の比率で、（父・母）に対する信頼が比較的多い。これに対し、ＰＭＤ児は父母に対し、低い傾向にある。しかし、（先生）に対しては、普通児よりやや多い傾向が伺われた。また（友人）についてはＰＭＤ児は普通児に比べやや少ない傾向にあり、特に１３才〜１４才において少ない。第２図の「影響をうけるもの」についてみると、ＰＭＤ児の（自分）すなわち、自分のみで判断するという比率の多いことが目立ち、特に１１〜１４才においては普通児と著しい違いがある。（父母）についてみると、ＰＭＤ児は普通児に比べ、父母の影響をうけることが少なく、特に（母）に対する１１〜１２才において著しい。しかし、（先生）から受ける影響は普通児よりやや多く、低年令層が、より影響を受けていることがわかる。また、（友人）については、普通児よりＰＭＤ児の１５〜１６才において友人の影響は少ない。



第３図の「話し合いの対象」についてみると（友人）においては、ＰＭＤ児と普通児とも同じ傾向



にあり、両者の差は判然としない。一方（いない）については、普通児、ＰＭＤ児とも高い傾向にあり、特にＰＭＤ児の１１～１２才が高い比率を示している。次に（父母）についてみると、１１～１２才の普通児に比べＰＭＤ児がきわめて低いことがうかがわれた。

以上の結果から考察すると、ＰＭＤ児にとって、父母の占める位置が普通児より、きわめて低い。また、先生についてもわずかに影響を与えるのみで、病院職員と同じ傾向にある。わずかに友人による影響や話し相手があるのみで、信頼する相手も少ないうえ、自分自身のからにとじこもりがちで、自分だけの判断でものを考える傾向にあり、特に低年令層において著しい傾向が伺われた。

26) 成人PMDのIQについて第1報

国立療養所箱根病院
稲永光幸　中村正敬
村上慶郎

Duchenne ＰＭＤについての知能検査についての報告は数多くみられているが、成人ＰＭＤについての知能検査は比較的少ない。

私共は今回、国療箱根病院に入院または外来に通院中の成人ＰＭＤ１３例（男子９例、女子４例、うちわけは*Limb-girdle* ４例、*Facio-Scapło-humeral* ５例、*Polymyositis* １例、筋強直性ジストロフィー症３例である。年令は１８才から６８才で平均31.5才である。使用知能検査はW--ＡＩＳ成人用である。

全ＩＱ（ＦＩＱ）は83.4±18.2と低下しており、従来の*Duchenne* ＰＭＤの成績と略同様の傾向をみせている。言語性（ＶＩＱ）と動作性（ＰＩＱ）の関係はＶＩＱ＞ＰＩＱとなっており、*Duchenne* ＰＭＤでの成績と逆の傾向がみられる。この一つの原因としては高年令が関係すると思われるが、小数例であるので、更に症例を重ねる必要があると思われる。

ＩＱ50～80の低値群とＩＱ90～120の高値群との間のプロフィールの差は、言語性において単語問題の得点に極めて大きな差がある。動作性では低値群に、符号・積木・組合せ問題に落ち込みがみられる。これは知覚・運動系の障害によるものかも知れないが、必ずしも機能障害の程度とは一致していない。

３例の筋強直性ジストロフィー症についても同様の傾向にある。

以上、比較的少数例なので、更に症例を重ねて、検討を加える予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<目的>

PMD 児を取り巻く環境要因の中で、特に人格形成上、大きな役割を果たすと思われる対人関係について、患児がどのように受けとめているか、また普通児(喘息児)と比較し、PMD 児の対人関係の受けとめ方が特殊なものがあるか、などを知り、年令による違いをも考察し、当病院における生活指導の一助としたい。(青年心理研究会の豊田氏の方法による)